

乳幼児期の仏教教育

北 畠 知 量

はじめに

子供は様々な苦に出合う。仏教はこれらを四苦や八苦に分類するが、教育学的視点から見て注目に値するのは、子供が発達課題を達成出来ない時に抱く苦である。親や教師や教育学者は、どうすればその課題を達成できるのかということばかりを考えてきたが、どれだけ頑張ってもこれを達成できない場合がある。その時子供は自信を無くし、充足感を得られずに苦しむことになる。

仏教は、こうして苦しむ大人には、苦の元となっている執着を捨てよ、自己を超えよと説き、解脱（往生）を促して覚りへ至らせようとしてきた。だが仏教は、幼い子供が抱く苦に正面から向かい合おうとはしなかった。^① 幼いなりに発達の課題に取り組み、それを達成できずに苦しむ子供

を、仏教はどのように救うことが出来るのであろうか。

本稿は浄土教を念頭に置きつつ、三歳頃までの乳幼児期の子供の発達課題とは何か、その課題を達成することが不十分であるときに子供はどのような苦を抱くか、その苦に対してどのような仏教的救済が可能か、そんな視点から見るとき、乳幼児期の子供に対する仏教教育はどのような姿のものになるかを考えてみようとしたものである。

【1】新生児

二五週頃の胎児は満たされた状態にあり、羊水の中で外界の光や音を感じている。そして約四〇週の在胎期間を経ると、子宮が収縮し（陣痛）、破水がおこり、胎児は未熟児状態で誕生することになる（生理的早産）。

子供は、産道を通して完全に外界に出た時点で突然激しく泣く。その泣き声は日を追うごとに意味あるものへと変化し、それとともに母親の対応も変化する。

泣いている子供にカンガルーケアをすると、子供は泣き止み、心音や呼吸は安定する。柔らかなもので抱き包んだり、胎内音と類似のホワイトノイズを聞かせたりしても泣き止む。そしてその効果は数ヶ月間持続する。このことは、(1)子供が胎内記憶(柔らかなものに抱き包まれ、リズムカルな胎内音を聞いていたという記憶)を保持しているということと、(2)カンガルーケアを受けたりホワイトノイズを聞いた時に、これは以前にあったことだと再認する主体が成立していることを示している。

では、このような主体である子供の発達課題とは何であろうか。

子供は、出生して一、二日すると、初めて空腹という生理的不快感に襲われる。そこで子供は泣く。これに気づいた母は、子供を抱きかかえ、乳を飲ませる。このような授乳が毎日六、七回繰り返される。Dスターンは、子供が泣き始めてから乳を飲んで満足するまでの一連の流れを細かに叙述しているが、これらを整理すると次の四局面になるだろう。

一、空腹感^②は、はじめのうちは弱く、やがて急速にふくらんでくる。すると子供が見る世界の様相は一変する。それまで連続的であった世界がハーモニーを失ってばらばらに崩れ、断片的なものになる。子供の呼吸は速く、強くなり、乱れはじめる。そして子供は泣き出

し、やがて力強いリズムの大泣きとなる。子供は手足を引きつるようになり、泣いて親に不快感を訴え、泣くことで何とか空腹感を和らげようとしている。

二、子供が泣くと、母がやって来て、子供に話しかけてくる。そのリズムやメロディーや音が、子供をやさしく包み込む。母は子供に触れ、子供を抱きあげる。すると子供は、ほんの今まで世界が破裂し拡張していると感じていたのに、突然、安心できる世界に包み込まれたように感じる。そして、母に抱かれて体位が変わると、興奮と不安が鎮まるように感じる。

三、およその見当をつけて子供に乳首を差し出す。子供は微調整(口唇探索)を行って、乳首を口に収め、吸っては休み、また吸うという行為を繰り返す。そのうちに空腹感はゆっくりと消えていく。そこで子供は「風は過ぎた。風がなぎ、空がやわらいだ」と感じる。子供は穏やかになり、ゆとりを取り戻し、再び目と耳を働かせて周りの世界に心を開くようになる。

四、乳首を含んだまま周囲の世界を見たとき、子供は、自分の二五センチ前に自分を見守る母の目と顔の輪郭を見ることになる。

こうして二週間すると子供は乳を飲むことになれ、一ヶ月もすると、自分が泣けばマザリング(抱かれ、満たされ、見守られる)をしてもらえするという事を学習(期待)し、声や匂いや顔の陰影などによって、そうしてくれる特定の人を母だと認知する。この授乳を通して、子供は

「母体との幻想的一体感（エリクソン）^③」を得、胎内世界の記憶の上に新たな母性的世界の感覚を積み重ねる。こうして子供は、自分はこの世に受け入れられているのだというベイスシックな感覚を得る。これが基本的信頼感（エリクソン）の基底となる。

子供に芽生えた主体が母と関わり、このようなベイスシックな感覚を得て生きる希望を芽吹かせること、これが、出生から二ヶ月頃までの子供の発達課題である。

泣いてもマザリングがなされなければ、子供は当然生理的不快感に襲われ、それを訴えて泣き続け、疲れて眠り、また泣くことになる。更にネグレクト状態におかれれば、子供は泣くことをあきらめ、サイレントベビーになっていく。大脳皮質がまだ本格的に活動していない状態の子供は、心理的な苦を感じることはないが、生理的な不快感には襲われる。それはこの世界に対する不信感の基底となる。

では仏教はそんな子供を救うことができるであろうか。

子供を救えるのは、マザリングだけである。仏教はマザリングに取って代わることは出来ない。だが仏教にできることが二つある。

（1）仏教は、子供をもつ母に働きかけることはできる。それは具体的にはa仏教的生命観を妊婦に説く、bマザリングが不十分な母に、仏教的な視点からマザリングの意義を説く、cボンディング障害や産後うつ病などでマザリングが出来ない母に、仏教的なカウンセリングをするといったことになる。

（2）また仏教は、マザリングを十分に受けずに育った人間に、絶対満足の世界（極楽浄土）があると説くことは出来る。

相応のマザリングを受けずに育った人間は、存在することの充足感を得られず、空虚感を満たそうと生涯を通して母の代替物を探し続ける。そんな人間に示される絶対満足の世界は、自我の発達に応じて、（一）生理的に満ち足りた不寒不熱の世界（欲界）、（二）心理的に満たされた世界（色界）、更に（三）自我そのものを超えた世界（無色界）へと高次化する形で示されることになる。

仏教が示すそんな世界は、人間にとって究極の救いとなる。人間に芽生えた自我は、浄土の救いを拒み、自らの力を信じ、自らを抛り所にしようとする。けれども、その自我が行き詰り、自らを抛り所とし得なくなった時、自我はこんな救いの世界を教えられることで、不如意な自分を超えて、不如意のままの自分自身を引き受け、そこが浄土の世界であったと気付くことが出来るのである。

【2】乳児

二ヶ月を過ぎる頃から大脳皮質の活動が本格化する。その結果、子供は自分にマザリングする母の容貌を識別し、その母に微笑み、声を出す（cooing）ようになる。こうして社会的になった子供は、新たな発達課題に直面する。

母は子供にマザリングを行い、子供はその母にアピールする。この呼応関係は様々な場面で展開されていくが、これを通して特定の母（一次的愛着者・Bジェームズ）に愛着し、その質を高めること、これが、二ヶ月から一歳半頃の子供の発達課題となる。この課題をうまく果たすことができないと、母への愛着はいびつな姿のものとなり、子供は心に苦を感じるようになる。

ではその苦の中身とはどのようなものであろうか。

かつてエインズワースは、母と子をなじみの無い場所（実験室）で分離・再会させ、その時の子供の様子を観察（Strange situation procedure 新奇場面法）した結果、愛着には三（四）つの型があると指摘した。これに則して考えると、母との呼応を通して愛着関係を築き上げる際に、子供は次のような苦を味わっていることになる。

A回避型。子供は、母が室から出ても抵抗や不安を示さない。母が再入室した時、子供は母に対して無関心か回避的行動をとる。

この場合、母は最初から子供を拒否（ボンディング障害）するかネグレクトしている。最初からこのような状態におかれていたのであれば、子供はこのような状況に適応し、応答しない人にアピールすることを諦めてサイレントベビーとなる。心が育たないので、子供は心理的な苦を感じなくなっている。⁽⁴⁾

B安定型。子供は、母が室から出ると不安になって泣き出すが、母が再入室すると程なく落ち着く。

この場合、母は適切なマザリングをしており、母子間には安定した愛着が成立している。ところがその母が、突然これまでのような応答を止めると、子供は大きな苦にさらされることになる。その様子は、still face 法によって確認する事ができる。

Eトロニックは、これまで応答的であった母親の顔が突然静止（still face）し、何の応答もなくなったとき、乳児がとまどい、声を出したり、手を差し伸べたりして盛んに母にアピールする様を報告している。

一〜四ヶ月までの子供は、泣くことはないが、やがてアピールを止め、そっぽを向いてしまう。⁽⁵⁾ それ以上の月齢の子供は泣き出し、全身で母の応答を乞い、絶望的な表情になる。このとき、子どもの顔面（額）の皮膚温度は低下する。母の顔面が静止している時間はわずか三分間であるが、このわずかな時間の出来事は、子供に想像以上の苦痛を与えているのである。⁽⁶⁾

この母が居なくなると、事態は深刻になる。

Rスピッツは、生後六ヶ月以上母と良好な関係にあった子供が母から離された場合にどうなるかを報告している。子供は、泣きやすくなり、体重減少、睡眠障害などが現われ、心身ともに不調をきたすようになる。分離から三ヶ月以上経つと、運動が緩慢になり、目はうつろで無表情になる（アナクリティック抑うつ・依託うつ病）。この抑うつは、母子が再開すると急速に回復する。⁽⁷⁾

このように、母子が良好な愛着関係にある時、その母が子供の愛着要

求を無視したり、子供の傍から去ったりして、自分は「抛り所」とはならないという態度を示すことは、この頃の子供にとって最大の苦なのである。

C 両極型。子供は、母が室から出る場面で非常に不安定になる。けれども母が再入室した時、子供は母に接触を求めながら激しく抵抗し、喜びよりも怒りを示す。

この場合の母は、子供の愛着要求に鈍感であったり、子供への対応にむらがあったり、自分の気持ちを過度に子供に汲ませようとしている。その結果、母子の呼応関係がうまく噛み合わなくなるのである。そうすると子供は、どのようにアピールしたらよいのか分からなくなり、母を求めたり拒否したりするような両極的行動を神経質に繰り返すことになる。これは、母に愛着したいが、どうアピールすればよいかが分からないという苦なのである。

D 無秩序・無方向型。子供は、母が室から出ることに強く抵抗する。けれども、再入室した母を回避したり、顔をそむけて母に接近したり、方向が定まらずに歩き回ったりする。

この場合、母は精神を病んでいるか、子供を虐待している。子供にとって母は、頼りにしたいが恐怖の対象でもある。従って子供は、この母に愛着すべきか回避すべきか、その基本的態度を決められずに苦しむのである。

以上に見た苦、つまり、母に愛着すべきか否かが決められず、愛着し

たいがどうアピールすべきかが分からず、愛着しているのに裏切られるという苦は、母の恶しき応答によって生じている。そしてこのような苦を抱えた子供の異様なアピールが、母の更に恶しき対応を誘発するという悪循環が生じている。

こんな苦を抱えた子供は、母が自分と呼応する優しい良き母になることを待ち望んでいる。たとえ安定した愛着が成立している場合であっても、子供は親から何度かは still face の時と同様の苦を受けている。勿論子供はその苦をすぐに忘れてしまうが、その記憶が消えたわけではない。このマイナス要因は愛着要求を一層強いものにし、子供はますます、この母がさらに良き母であるようにと待ち望むことになる。

では仏教はそんな子供を救うことができるであろうか。

そんな子供を救えるのは、優しい良き母（親身に子供と関わる者）だけである。仏教は、そんな母に代わることは出来ない。

だが仏教は、優しい良き母を知らず、母に愛着することなく育った子供に、そのような母の原型的観念を示すことはできる。

この世のどこかに優しい良き母があり、自分を常に見守っている。この母は、子供の呼びかけに応じて現れる。不安や恐怖に襲われた時は、この母のもとに行けば母に抱かれて安心することができる。

自分を見守る優しいよき母という原型的観念は、生涯に渡って心の奥底に保持されていく。そしてこの観念は、自我が存亡の危機に直面する

と、ごく自然に意識の上に浮かび上がってくる。死に直面した兵士や遭難者が母を呼ぶということはよく聞く話である。自我は、我を忘れてこの母に呼びかけるのである。

このような場面を示唆する物語を見てみよう。

五位と呼ばれていたその男は、殺生を生業とし、山や野原に行っては鹿、鳥を狩り、河や海に行っては魚を捕っていた。人の首を切り、手足を折らない日は少なかった。このようなきわめつけの悪人であったため、この国の人は、皆、五位を恐れていた。

ある日、五位は家来を四、五人ほど連れて鹿を狩りに行き、その帰り道、お堂で教えを説く講師に出会う。五位の求めに応じて講師は説く。

「ここから西の方、いくつもの世界を過ぎた向こうに阿弥陀仏がおられる。その仏は心が広く、長年罪を積み重ねてきた人でも改心して一度でも阿弥陀仏と唱えれば、必ずその人を迎えに来てくださります。豊かで素晴らしい国に生まれ変わり、願いはすべてかない、そして最後には仏となることができる」と。

五位は、自分のような悪人でも救われる事を確認すると直ちに髪をそって入道となり、鉦を叩き、「阿弥陀仏よや、おーい、おーい」と大きな声を張り上げながら、ひたすら西に向けて歩き出す。

五位入道は、西の方角に海がよく見える高い峰の上まで来た。入道は、そこに生えている木の上に登り、「阿弥陀仏よや、おーい、おーい。ど

こにいらっしゃいますか」と叫ぶと、海の中からすばらしく美しい声で「ここにいる」とお答えがあった。入道はその後ずっと木の股のところで西に向かって座り続け、やがて死んだ。その口からとても美しい蓮の花が一輪生えていた。⁸⁾

『今昔物語』に登場するこの五位は、母に愛着することなく育った原始的な自我（交流分析で言う子供 Child）を象徴している。五位は、万能感を抱いて自由奔放に生きているものの、自分が人々に憎まれ恐れられていると感じている。だから五位は、そんな自分に充足せず、ひそかな罪悪感を抱いている。だが彼はこれを強引に押し潰して己を維持してきたのである。そこに五位の苦がある。だが、時（カイロス）は満ちた。罪悪感から開放され、母に抱かれ満たされたいという五位の深い願いは、講師の話によって一挙に開花する。そこで五位は、ひたすら弥陀（母）の名を呼び、どんどん西方に向かって歩み続ける。この呼びかけに、ついに弥陀は「ここにいる」と応じた。樹上で死んだ五位の口から蓮華が咲いたということは、五位が弥陀の国（蓮華蔵世界）に往生した事を示している。

日本的・仏教的文化圏にあつては、心に愛着の苦を抱えて育った自我は、時（カイロス）が満ちると、突然に良き母を求める気持ちが沸き起こり、母に抱かれて安らぎを得ようとするのである。⁹⁾

この母は仏と重なってくる。そこで仏教は、やがて芽生えてくる自我

の発達レベルに応じて、この仏を、(一)彼方の世界に実在し、常に自分を見守り、絶対的な拠り所となる慈愛に満ちた母なる仏として、(二)あらゆる命がそこから生まれ、またそこに帰っていく命の仏(無量寿)として、(三)法そのものとして説き示すことになる。

寄る辺なき人間は、自分を見守るそのような仏の存在を信じ、これに帰依することで、根源的な安らぎを得ることが出来るのである。

【3】 幼児初期

母に愛着し母を安全基地とすることができた子供は、母との間で「共同注視」「社会的参照」「意図の共有」などが可能となるので、親の心がある程度は察することが出来るようになる。一歳半頃になると、子供が話せる言葉は十語くらいだが、かなりの言葉を理解でき、一語文を介して親ときこちないやり取りができる。自分というものが次第に出来てきて、自分と家族との関係が分かるようになり、外界に対しても興味・関心を示すようになる。では、この頃から自我の目覚めがおこる三歳頃までの間に、子供はどんな発達課題と向きあうのだろうか。

親の心を察すれば察するほど、子供は思い通りに振る舞えなくなってくる。そして子供は、親の求めに応じて自分の意志で自分をコントロールせねばならない。自らを律する意志 Will の獲得(エリクソン)、これが幼児初期の発達課題である。

この課題に取り組む子供の姿を描いたお話がある。それを三つ概観しておこう。

岩手県の民話「手出し峠」は、おりきの一人息子である九助が、母親の強い励ましをえて、村はずれの峠のほら穴から出る化け物を退治する話である^⑩。臆病な九助は、母親の強く命じられ、怖さを必死にこらえて峠に向かう。九助は、化け物と遭遇して何度も逃げ帰り、そのつど母に励まされ言い含められて、また化け物に向かっていく。これが何度も繰り返される。民話の主題は、怖がる自分を律して化け物に向かっていくという所、つまり自律の意志を奮い立たせるという所にある。

齊藤隆介の作品「モチモチの木」は、「モチモチの木」と名づけたトチの木が怖く、夜は、じさまを起こさないと雪隠に行けないほど臆病者の豆太が、腹痛で苦しんだじさまを助けるために、暗闇の中、半里も離れた麓の村まで医者呼びに行き、医者が来てじさまは助かるというストーリーである。豆太が必死の思いで勇気をふりしぼって恐怖に耐え、医者呼びに行こうとする所に作品の主題がある。雪明かりで、じさまの話していたモチモチの木の意味を知り、相変わらず豆太はじさまを起こさないと雪隠に行けなかったという落ちがつくのだが。

筒井頼子の作品「はじめてのおつかい」にも同じ主題が見られる。この作品は、五歳のみいちゃんが、ある日ママから牛乳を買いにいくお使いを頼まれ、驚いて飛び上がるけれども、これを引き受け、どきどきしながら、困難を乗り越えて、お使いを果たすというストーリーである。

お母さんにお使いを頼まれ驚くけれど、これを引き受けて出かけるという所に作品の主題がある。

お話に登場する子供達が取り組んでいるのは、自律の意志を強く持つという課題である。それは、幼児初期の子供が初めて直面する課題である。幼児は、お兄さんやお姉さんがこれに取り組む姿に自分を重ねドキドキしながら聞いているのである。

お話の中では、オリキが息子を励まし、じさまが腹痛をおこし、ママがお使いを頼んだことで、子供は自律の意志の力を奮い立たせている。この人々は、子供がかつて深く愛着し、子供の安全基地になった人々であった。だがこの人々は、一歳半ばを過ぎた幼児初期の子供達にとって、これまでのような単なる母性的安全基地ではなくなり、子供に自律を促がす親という性格を帯びている。

お話の中では、子供は自律の意志を何とか発揮し、困難と格闘しながら何とか課題をやり遂げるのであるが、現実の場面ではこううまくはいかない。現実の場面で子供がどのような苦に直面するか、その典型的な姿を概観してみよう。

一．恐怖

二歳前後の子供は、自分に怖いものが迫ってきてても、それから身を守ることができず、それを攻撃することもできない。自分で身を守れないから、どうしても臆病になる。未知なるものを見せられたり、怖そうな

人が近づいてきたり、なじみの薄い場におかれたりすると、固まったり泣きそうになったりする。この時子供は怖くてびくびくしている。子供は、親の助けや励ましを得ることで何とか自分を律し、そのような恐怖に耐えることになる。

子供が発達するにつれて、親は、次第に高度な自律を求めていく。泣き出しそうな子供に我慢を強い、泣いている子供に泣き止むように求める等々。そんな要請を受け入れ、自分の意志で自分を律することで、子供は育つ。けれども、大声をあげて無遠慮に接近する大人、突然の転倒、吠えかかる犬、波打ち際で自分に押し寄せる波、暗闇等々は、圧倒的な力で子供に襲い掛かってくる。こんな魔物は、突然に現れて、自律の意志を粉碎し、子供を悲劇の底に突き落とす。自律の限界を超えた状況に置かれた子供は、恐怖という苦をいやというほど味わうことになる。

二．恥

二歳を過ぎた頃から、親は子供に排泄、食事、睡眠といった基本的生活習慣の確立を次第に強く求めるようになるが、こうした親の要請（躾）が日常的にくり返されると、子供はやがて、この要請を受け入れ、自分で自分を律するようになる。親からの他律を、自らの意思による自律へと変えるのである。こうして子供は育って行くが、基本的生活習慣は一挙に確立するのではなく、度々失敗がくり返される。その度に子供は、親に対して恥の感情を抱くことになる。^①このような自律の場面では、子

供の苦は恥という姿のものとなる。

三、不安

またこの頃、子供は自分の気持ちを強く主張することがある。そんな時、親はうまく子供をなだめすかし、子供は丸め込まれて落ち着く場合がほとんどである。だが、子供の思いがことのほか強く、それを親が拒むと、子供は親に反発して癇癪をおこし、怒りを爆発させることになる。それへの対応がまずいと子供はますます怒り狂い、手のつけられない状態になる (terrible two)。子供は自律の状態から暴走を始めたのである。ではその結果どうなるか。

親が子供を見限るような行動に出ると、子供は親に見捨てられるという不安にさいなまれ、泣きながら親の後を追いかける。この時点で子供は、自分が愛着した親に見捨てられるという不安に打ちのめされ、自己主張を諦めて無力な自分を認めねばならない。見捨てられるという不安は、子供にとっては大きな苦なのである。

四、疑惑

先の状態の子供が、自己主張を断固として曲げず、親に見捨てられた場合どうなるか。

子供は、見捨てられ一人にされたたみじめな自分との折り合いをつけねばならない。その時子供は、自分は本当に親に愛され、認められ、受

け入れられているのだろうかという疑惑にさいなまれている。子供はここで疑惑という苦を抱え込む。

これらの苦を味わっても、子供は間もなくそれを忘れてしまう。だが、しばらくはそれを引きずることになる。では、しばらくこのような苦を抱える子供を、仏教は一体どのように救うことが出来るのであろうか。

仏教に出来ることは、子供が何とかして自律の意志を強く持とうとするときに、常にお前を励まし支える味方がいるのだということを説き示すことだけである。この味方は苦を癒し子供に力を与える。ようやく自分で歩き始めた幼児前期の子供たちの心にあわせて、このような味方がいるということを説き示すこと、これがこの時期の仏教教育の基本となる。

仏教は、アニミズム的段階にある子供に対しては、あらゆるもの（月、太陽、大木やペットなど）が、そしてまた、子供がしばしば見る仏像が子供を見守り支えているという脈絡で、この味方の存在を説き示すことになる。

また学童期以上の子供に対してこの味方は、おりきのように強く迫って励ます者、じさまのように子供が動き出すのを待つ者、ママのように優しく促すものなど、様々な姿で説き示されるが、仏教的脈絡として説き示すには、厳しく強く優しい「坊様」のイメージがぴったりである。

ただし近年は、そんなイメージをもつ「坊様」は見かけなくなってしまう。

仏教はこのような味方の姿を天、竜、夜叉、迦楼羅など（八部衆）として表す。八部衆は、もとは神であり、仏法の守護者となった者達である。彼らは、仏法が働くことで人間が究極の覚りへと育っていくことを支え続ける味方たちなのである。

また仏教（浄土教）はこのような味方を諸仏と表現する。人間は、諸仏という味方の護念を得て往生を遂げるとするのである。

幼児初期に抱かれることとなる味方の観念もまた生涯にわたって保持され、自我が窮地に陥ったときに、様々な文化的色彩をまとった姿で意識化されてくる。人間は、このような味方を心に抱くことによって、自らを維持し、更なる発達の旅を続けていくことができるのである。

まとめ

以上、三歳頃までの子供が直面する発達課題と、それが達成できない時に子供が抱える苦の姿を概観した。

このような苦を抱える子供に対して、仏教は「自分が満たされる世界が必ずどこかにあり、そこにいる母なる仏は常に自分を見守り受け入れてくれ、その仏に連なる味方は必ず自分を支えてくれる」という教えを説き示すことになる。

子供の発達にあわせて、このような絶対満足の世界と仏を説き示し、そんな仏を思い、祈り、これに呼びかけをすることの指導が、自我に目

覚める前の子供に対する仏教教育の原理となる。

註

(1) 仏教が子供の苦にまったく向かい合わなかったわけではない。(一)仏教は子供に四諦八正道を易しく説こうとした。これは、苦から覚りへと到る仏教の正道である。(二)仏教は子供に型もしくは行（出家、座禅、托鉢、あるいは挨拶、食事、掃除など）を示し、修行を促そうとしてきた。(三)仏教は子供に道徳的内省を迫った。内省を迫り、自我が利己心を抱くがゆえに苦しむ姿に気づかせ、その状態を越えるように促した。(四)仏教は子供に称名・念仏せよと促した。

(2) だが仏教がこれらをどれだけ熱心に説き促しても、どれ一つとして、自我に目覚める以前の三歳頃までの子供の心に響くものはない。ダニエル・スターン 亀井よし子訳『もし、赤ちゃんが日記を書いたら』第3章。草思社。一九九二年。

(3) E H エリクソン 西平直訳『青年ルター』2。みすず書房。二〇〇三年。ここでは「母体との幻覚を覚えるような一体感」と訳されている。四二〇頁

(4) こんな子供を抱いてあやしても、体は固く、身を任せてこない。くすぐっても笑わない。視線を合わせようともしない。しかも摂食には異常が見られ、頭打ちのような自傷行為が出現する。

(5) E. Tironick, et al., 1978 なお、乳児の反応は、月齢によって異なる。四ヶ月までの乳児は、泣き出すことは無い。その動画は、インターネットでも配信されている。なお、乳児の苦に関しては、Still face 法以外に、授乳のリズムを乱したとき、泣き声に対応しないとき等々、様々な事例を観察することで、その実態を調べる事ができる。

(6) 三分の静止時間が過ぎ、母の顔が再び応答的な動きを取り戻すと、子供は「ああよかった」という表情を見せて、母との交流を再開する。マザリングを受けて親と親しみ、親とさらに交流を深めようとしていた子供は、初めて自分を無視する母の姿に直面し、その事態に対応できず、泣き出すほどの苦を味わったのである。

(7)

猿の母子を分離し、隔離飼育した場合、一定期間を過ぎて再会させると、小猿は母に愛着しようとするが、母猿は育児行為をしなくなる。また、ボウルビーは、安定した母子関係にあった生後十五〜三十ヶ月の子供が母から分離されると、抗議期、絶望期、離脱期を経ると報告している。『母子関係入門』一九八一年。星和書店

(8)

今昔物語集第十九卷十四「讃岐国多度郡五位間法即出家語」キリスト教文化圏の中で原型的救済観念を象徴するのは、『マッチ売りの少女』であろう。この少女と母を結ぶものは、母の残した靴だけである。だが少女はそれさえ無くして裸足になってしまった。少女は、大晦日の厳しい寒さの中、路傍でマッチを売っている。けれども誰も少女に声をかけてくれない。呼応の無い世界にいる少女は、ネグレクトされた子供そのものである。

少女はマッチをすることで、自分の救いの世界を捜し求める。暖かなストーブ、おいしいような食べ物、立派なクリスマスツリー、それらはマッチの炎と共にすぐ消え去り、少女の救いとはならない。マッチをすって現われたおばあさん（少女を愛したことのあるたった一人の人）に、少女は「おばあさん、お願い、私を連れてって」と呼びかける。この世の何物にも救いを見出せなかった少女は、おばあさんの腕に抱かれ、他界（天国）に行くことで救われるのである。

少女は、天国に行きたいという機が熟して天国へ行ったのではない。この世に救いの世界を見出せなかった少女は、おばあさん（良き母）に連れられ天国に行くことだけが救いとなるのである。

西洋的・キリスト教的文化圏にあっては、自我は度重なる不幸に打ちのめされてどうしようもなくなった時に、ようやく良き母に抱かれ、神の国へ行って救われるのである。

(10)

まんが日本昔話。TBS 一九八二年五月一日放映。

バスらは、親にアンケート調査を行い、三〜四歳児の子供の四分の一、五歳の半数、六歳児の七割強に恥の感情が現れるとした。The development of embarrassment. The Journal of Psychology, 103 227-230. 恥の感情が現われる時期に関して、ルイスは一歳十ヵ月頃

(11)

を想定した。Lewis, M., Sullivan, M. W., Stanger, C. & Weiss, M. 1989 Self development and self-conscious emotions. Child Development, 60, 146-156.